

早期研究室体験実習の感想

私は早期研究室体験実習の期間を通して、生化学の研究室に一ヶ月間お世話になりました。私の場合はテーマを与えられて研究するというスタイルではなく、これから生化学系の研究をするにあたり必要な実験手技を身につけるというスタイルでした。これは私がこの実習期間前に研究室の教授にお会いして、せっかく実習するのなら基礎からしっかりと勉強したいと思い、希望したからです。様々な手技だけでなくその原理なども学習し、ひとつひとつの操作の意義について調べたり、教えていただいたりして、「なるほど！」とひとつの操作でも感動を覚えることができました。また、このような基礎をしっかりと学ぶこともとても重要なのだと思いました。

また、これまでの実習の成果発表と英語論文の紹介をするという課題がありました。英語論文は今まで一度も読んだことがなく初めての体験だったのですが、必死に読み学習したのでなんとか内容はおおよそ理解できました。そして、その論文はきれいに理論立っており、論文の構成や実験の組み立て方についていくらか学べたと思います。しかし、自分のプレゼン能力がとても低く、悔しい思いをしたので、これからしっかりと身につけていかなければならないと実感しました。

この一ヶ月間は大学に入学して、勉学に関しては一番充実した日々を送れたと思います。また、将来について抱いていた不安がだいぶ減り、逆に楽しみに思えるようになりました。勉強不足だなと感じる部分が多々あったので、これからしっかりと勉強し、将来の研究生活につなげていきたいと思っています。(K.C)

今回の「早期研究室体験実習」および「フリークォーター」では、およそ2か月にわたり医化学分野に在籍しGタンパク質共役型受容体に関する研究を体験しました。具体的には、プラスミドDNAの組換えから培養細胞への遺伝子導入、安定発現細胞株の樹立とその細胞を用いてのアッセイという一連のまとまった実験に加え、組織切片の作成から免疫染色、蛍光顕微鏡観察など幅広い実験を体験することができました。ここでは本実習で有意義だと感じた点について述べたいと思います。

最も有意義だと感じた点は、やはり研究者としての生活を体験できたということです。日常の講義や実習では知ることのできない研究者としての生活を、3年生という早い段階から1か月あるいはそれ以上の期間にわたり体験することは、将来研究者を目指す生命科学の学生にとってはとても有意義で、他の学部・学科ではなかなか得られない貴重な経験であったと思います。研究室での生活を共にすることで、スタッフの先生方や大学院生の方たちの話を聞く機会を多く得られたことも、自分の将来を考える上で参考になりました。また、実際に実験を行うことでこれまで学んできたことに対する理解が深まりました。「百聞は一見に如かず、百見は一試に如かず」というように、新たに技術や技能を習得する際にはやはり自分の手を動かすことが非常に重要だと感じました。さらに、実験の原理や結果について考えることによって教科書的な知識の必要性を実感することができ、今後の学習に対する意欲も高まりました。

この研究室体験で学んだことや感じたことを今後を活かし、これからの研究生生活を楽しんでいき

たいと思います。最後になりましたが、医化学分野の皆さんには大変お世話になりました。深く感謝いたします。(森崎雄一)